

戦争前後の榎法華村の暮らし

その他（別言語等） のタイトル	The Life Before and After the Pacific War in Todohokke
著者	橋本 邦彦, 島田 武
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	11
ページ	21-47
発行年	2013-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2711

戦争前後の榎法華村の暮らし

その他（別言語等） のタイトル	The Life Before and After the Pacific War in Todohokke
著者	橋本 邦彦, 島田 武
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	11
ページ	21-47
発行年	2013-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2711

戦争前後の楸法華村の暮らし*

橋本 邦彦、島田 武

The Life Before and After the Pacific War in Todohokke

Kunihiko HASHIMOTO, Takeshi SHIMADA

Abstract : This article deals with the life of fishers in Todohokke before and after the Pacific War (1935-1945) on the basis of the oral data of the interview with a former fisherman in 2006, September. The data treated consist of three parts which account for about 33% of the whole stories taking 54 minutes 39 seconds in record. They almost equal one third of the parts which Hashimoto, Shimada and Shionoya (2011) did not take up. We have put the recorded data into kana-letters and added the corresponding translation of the standard Japanese as exactly as we can. The research will reveal how the life before and after the Pacific War was led by fishers in the village.

Keywords : Todohokke, Pacific War, village life, fisher, seasonal work

1. はじめに

2000年7月に「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の名の下に第1回聞き取り調査を楸法華村（現在函館市）で実施して以来、2012年までに合計12回に及ぶ実地調査が渡島半島を中心に行われてきた。その中で2006年9月14日～16日に実施された元漁師への聞き取り調査の一部は、橋本・島田・塩谷(2011)で公表されている。そこで扱われたテーマは、「少年時代の漁業の手伝い」と「北方領土への出稼ぎ」であった。本稿では、紙幅の都合で採り上げることのできなかつた太平洋戦争以前の楸法華村の暮らしの様子が語られている部分に焦点を当てる。

第2節では「戦争中及び戦争直後の村の状況と近隣との交流を含む村の生活」が、第3節では「高等小学校卒業後の出稼ぎの様子」が語られている。各節には、記録された音声をできるだけ正確にカタカナで文字化したものと、それに対応する標準日本語の訳を付した¹。また、第4節では談話に現れた方言語彙と思われるものを、あいうえお順に分類し、標準日本語の意味と用例を談話中から引用する形で提示した。第5節は結論で、本稿で明らかにされた事柄の意義と、今後の調査・研究の展望について述べる。

被調査者の彦野勇氏は1924（大正13）年生れの元漁師で、生涯のほとんどを楸法華村で過ごした。調査者は2名で、橋本がインタビューを、島田が音声録音を、各々担当した。調査場所は灯台博物館ピカリン館（現在函館市灯台資料館と改名）で、展示されている戦前の

向こうは 富浦ですよ。

11 橋本：ヤマアッテ。

山があって。

12 彦野：ソソ ココ ココノ ソレコサー ウチワカゾエルダケシカナカッタダ

そうそ ここ ここの それこそ 家は数えるほどしかなかったんだ

コノサキマダ。

この先はまだ。

13 橋本：ドーロワナイショネー イマー。

道路はないですよねえ 今は。

14 彦野：ズーント ココガドーロセ。ココガドーロナンダ。ドーロダッテー イマノ

ずうっと ここが道路です。ここが道路なんだ。道路だと言ったって 今の

ケートラックワ ケートラックガアルクグレー ヨーヤクナンダ。

軽トラックは 軽トラックが通れるくらいで ようやく（通れるくらいの道幅）
なんだ。

ショーネカッタダ、ココカラナンモネーカラ マダノ。

仕方がなかったんだ、ここから何もないから （当時は）まだね。

ドコカラデモ ハマサオリテクショーガネカッタダカラ。

どこからでも 浜に下りて行くしか仕方がなかったんだから。

15 島田：ナルホド。

なるほど。

16 彦野：ムラジュードコカラデモ ノ。

村中どこからでも ね。

Track 4

17 彦野：ソレカラー ソノトージダバ

それから その当時は...

18 橋本：ヒコノサンワ ズーットトミウラデスカ。トミウラニスンデ ズーット。

彦野さんは ズーット富浦ですか。 富浦に住んで ズーット。

19 彦野：ソーソ。 トミウラノイチバンコーコッチハジダバ アッチカラクレバー

そうそう。 富浦の一番こうこっちの端だから あっちから来れば

ウチイッケンシカネートコアルベ。アシコカラチョイトイッタトコー

家が一軒しかない所があるでしょ。 あそこからちょっと行った所に

チョットサ ソッチチョットノビタトコロニ ナンネンイタバナー。

ちょっとね そっちにちょっと延びた所に 何年いたろうなあ。

シバラクイタンサ。

しばらく（住んで）いたんですよ。

20 橋本：カワッテマスネー ヤッパリネー。

（様子が）変わっていますね やっぱりねえ。

- 21 彦野：ソーソ。 ココワコノトーリ ナンモ ソレコサー ドーロカラドコカラデモ
そうそう。 ここはこの通り 何も それこそ 道路からでもどこからでも
ハマサオリレバーヨカッタ。
浜に下りればよかった。
- 22 橋本：ドコカラデモ オリレタ。
どこからでも 下りれた。
- 23 彦野：ソレコサー ジブンデツカイテルノワー イシヤニタノンデー イシガキツインデ
それこそ 自分で使っているのは 石屋に頼んで 石垣を積んで
モラッテー ソイデ ソコサモノーキツクルトカー ノ。ソイナミンナ
もらって それで そこに物置を作るとか ね。そういうのをみんな
コジンデヤッタモンダ。ムラジュードコカラデモ ハマサオリレバーヨカッタ ナ。
個人でやったもんです。村中どこからでも 浜に下りればよかった ね。
ソレノーネートコワ ノ ソーヤッテタッテルトコワ ホラ オリラレナイケド
それがない所は ね そんな風に建っている所は ほら 下りることができ
ナ アブネーカラ。アドモドーデモスキナトコロカラオリデー
ないけれど ね 危ないから。 けれどもどこでも好きな所から下りて
ベンリダッターンダー。
便利だったんです。

No.1～No.8 で語られている戦時中のアメリカ軍による艦砲射撃については、『楳法華村史（以降、村史と略称）』（1989: 1309）の年表から裏付けることができる。1945年（昭和20年）7月15日に、米艦隊が恵山沖に侵攻する。この展開は、No.2 で述べられているように、同日米戦艦8隻ほか多数の機動艦隊が室蘭を砲撃した事態と連動している。楳法華村では、米軍艦載機の空襲により、恵山岬灯台、霧信号所及び楳法華国民学校が焼失、爆弾攻撃で村役場が破損、機銃掃射のため4名が死亡するという甚大な被害を被ったのである。それは、楳法華村の置かれた交通の要衝という地理的な理由に加えて、No.6 で言及された函館15大隊の分隊が駐屯していたからだと考えられる。実は、『村史』には分隊の駐屯について触れられた箇所が見当たらないが、他方、彦野氏や別の調査協力者である玉村栄吾氏の証言には度々登場する²。

No.9～No.23 は、彦野氏が調査当時住んでいた富浦地区を中心とした戦後すぐの村の状況、特に、道路や浜の様子が語られている。次ページに掲げた地図に見るように、楳法華村は三方を山に囲まれ、唯一の開口部の太平洋海岸部に張り付くようにして居住地域が縦に広がっている。富浦地区は、村役場やコミュニティーセンターのある比較的地勢の開けた浜町、八幡町の中心部から海岸線に沿って走る道道楳法華港線沿線の始発点に近い狭隘部に位置している。このような地域では、船着き場を作る空間的ゆとりはないので、船を出すのに「No.21 彦野：ドーロカラデモ ハマサオリレバヨカッタ」のであろう。実際に、現在でも、海岸伝いの物置小屋の傍らに磯船の置いてある光景を目にすることができる。



地図 1：楯法華村全図³

Track 27 から Track 44 では、さらに詳細に楯法華村と隣接する地域の様子が語られている。

Track 27

24 彦野：イマノココ ドーロツイテルダッター アレー ドーロ マエ デキタノ
今のここに 道路があるといったって あれえ 道路が 以前に できたの

イツダヨナ。 ショーワナンジューネンダカラ。

いつだっけね。昭和何十年だから。

25 橋本：ズーットアトダネ。

ずうっと後だね。

26 彦野：ウン ソレマデ ドーロ

うん それまでは 道路

Track 28

ドーロツチューノ ネーンダワ。

道路みたいなものは ないんですよ。

27 橋本：ハー とんねるモナカッタシネー コッチネー。

はあ トンネルもなかったしねえ こっちにねえ。

28 彦野：ソーソー ダカラ

そうそう だから

Track 29

ココ ココカラサー チョットエサンマデ フネデモツテイケバー エサンマデ

ここ ここからねえ ちょっと恵山まで 船で運んでいけば 恵山まで

ナラ ホラー ムカシワネタナイツテイッタモンダケドノー

なら ほら 昔は（恵山のことを）根田内って言うていたけれどねえ。

イマミタイニ エサンデネンダ ムカシミタイニ ノ。オレタチワ ?⁴

今のように 恵山ではないんだ 昔みたいに ね。私たちは

ダカラ ネタナイイッテタモンダー。

だから 根田内って言うていたものです。

29 島田：ネタナイ。

根田内。

30 彦野：イソヤダトカサー ネタナイダトカ フタツイニモ ミツツニモナッテアッタンダ

磯谷だとかね 根田内だとか （村が）二つにも 三つにもなっていたんだ

トージワノー。ダケドモ ホラ ドーニカコーニカ とらっくオーキクネーバ

当時はねえ。 けども ほら どうかこうにか トラックが大きくなければ

オーガタデネーバ クルマハイルクライノドーロワ ツイーテアッタンダ。

大型でなければ 車が入るくらいの道路は 付いていたんだ。

Track 30

ムコーワノ ズーット ブラクガツツイテイルカラ ココ アッチモコッチモ

向こうはね ずうっと 部落が続いているから ここは あっちもこっちも

イカレネードコダカラ。

行かれないところだから。

31 橋本：ヤマニカコマレテテネ。

山に囲まれててね。

Track 31

32 彦野：ダカラ ココワ ソレ ワカンネガッタケドモ ムコー ホラ
だから ここは それ わからなかったけれども 向こう ほら
アッタモンダカラ ダカラソコマデイッテ アミオロシテ
(道路が) あったものだから だからそこまで行って 網を下して
ダカラ アイダー ナンダッテ ホラ トージワマダハイキューダカラノ。
だから あれだ なんだって ほら 当時はまだ配給だからね。
コムギモ ナンデソーユーショクリョーヒンワ ゼンブハイキューデショ。
小麦も 何でもそのような食料品は 全部配給でしょ。
ソノハイキューモラウンダッテ ホラ ナツノウチワイイサ ノ。
その配給(品)をもらうんだって ほら 夏の間はいいさ ね。
フネデショッテイッテ モラッテクレバイインダカラ。コンドユキフッテ？⁴
船で背負って行って もらってくればいいんだから。今度雪が降って
クレバ コッチワアルカレネーシ コッチワナンテカテ
くれば こっちの方は歩くことができないし こちらはどうやっても
コッチエイカレネーカラ アイダー ナゲーグネバ ホレ
こっちへは行かれないから あれだ (靴が) 長くないと ほら

Track 32

イカレネーベ。 カンゼファイタリ シケタリスレバ ホラ。
行くことができないでしょ。風が吹いたり 時化たりすれば ほら。
33 橋本：イカレナイネ。
行かれないね。
34 彦野：イマミタイニ フナイレバモネーシ。
今みたいに 船入れ場もないし。
35 橋本：ナカッタンダネー。
なかったんだねえ。
36 彦野：ナンモネカッタカラ ミンナジブンデ
何もなかったから みんな自分で

Track 33

フネツクッテ ノ。ヤマカラキーキッテ ソレヲナンボコーハーワタシテ
船を作って ね。山から木を切って それを何本もこのように渡して
ソノウエ ココフネ ホラ マイタリオロシタリシタモンダダカラ。
その上に ここで船を ほら 巻いたり下したりしたものだから。
ソーヤッテノー ソシテヤッタモンダカラ ケッキョク アイダノセ ハー
そうやってねえ そんな風にやったものだから 結局 あれだな はあ
コノドーロデキルマデ ゼンゼン。ダカラ ムコーエイマコサ
この道路ができるまで 全然。 だから 向こうへは今でこそは

とんねるアケテ フルベサイクベータッテ ソノトージ ゼエンゼエン
 トンネルを開けて 古部へ行けるけれど その当時は 全然
 イカレネーベ。 オラ アノヤマノ アノシッタカワー ホイデモ
 行くことができないでしょう。私は あの山の あの下側を それでも
 ホラ トージデモヤッパリノー デンチューワタッテタンダー。デンキ ホラ
 ほら 当時でもやっぱりねえ 電柱は立っていたんだ。 電気は ほら
 アイダカラノ。ココモーマダ デンチューワズーットタッテルケドノー。
 あれだからね。ここもまだ 電柱はずっと(向こうまで)立っているけれどねえ。
 アシィコデ ヤマゴエスルンダヨ。
 あそこで 山越えをするんだよ。

37 橋本：ヤマミチトーッテイクノネ。

山道を通って行くのね。

38 彦野：ホイデ ココニュービンキョクガ

それで ここに郵便局が

Track 34

ヤッパー ホラー ソイコサー ホラー ガキノコロカラアッタケドモ ノ。
 やっぱり ほら それこそ ほら 子供の頃からあったけれども ね。
 ムコーワ ホレ フルベッテトコワ ココトオナジデ ムコーサモコッチサー
 向こうは ほれ 古部っていう所は ここと同じで 向こうへもこちらに
 コレーネーベ。
 来られないでしょう。

39 橋本：コレナイネ。

来れないね。

40 彦野：ヤマコエネバ。 ダカラ

山を越えなければ。 だから

41 橋本：ウミマデデテマスモノネー。

海まで(山が)出ていますものねえ。

42 彦野：ケッキョク フルベイクサー ユキミチデモナンデモ ココサクルンダワ。

結局 古部へ行くなら 雪道でもなんでも ここに来るんだわ。

ココニシルワケダ オクルシトワノ。ダカラ ハイタツショッテ りゅっくサ
 ここに着くわけだ 送る人はね。 だから 配達品を背負って リュックに
 イレテーショッテ ナンテユーカー ホラ ソイコサ イマミタイニノ
 入れて背負って 何ていうのか ほら それこそ 今みたいにね
 クチデモナンモサー ナゲーノッテタラナゲーノ ミジカイノッテタラミジカイ
 靴でもなんでもねえ 長いものだったら長いもの 短いものっていったら短い
 ノ イマダラナンボデモアルデショ。トージワ ネーダモノ。ダカラ ホラ
 ものが 今ならいくらでもあるでしょう。当時は ないんだもの。だから ほら

ミジケーコンナンノクチシカ ネーベサ。ンダカラノ キレデツィクッタ
短いこのような靴しか ないのさ。それだからね 布で作った
ジッコミタイナモンデノー ツィクッター。ジブンデツィクッテ コーコン
ズックみたいなものでねえ 作った。 自分で作って このような
ナゲーモンツィクッテ ヒモデムスンデー クツサユキハイラナイヨーニシテ
長いものを作って 紐で結んで 靴に雪が入らないようにして
ソーヤッテ ホレ オラモナンカイカハイタツノケツツイデ ホラ
そうやって ほれ 私も何回か配達（夫）の後ろからついて行って ほら
コエタコトナンドモアルケド。 フルベマデ コーヤッテノ ホントノ
（山を）越えたことが何度もあるけれど。古部まで こうやってね 実際の
ウチノアルトコマデイカレーネーワケサ。ソコイッテノ
家のある所まで行かれないわけさ。 そこへ行ってね

Track 35

ハマサオリネバ。 トコロガコンド ハマサオリレバ ノ カンチャーノ
浜に下りなければ。 ところが今度は 浜に下りれば ね 干潮の
トキニワ イイノセ。
時には いいのさ。

43 橋本：ミズヒーテルカラ。

水が引いているから。

44 彦野：アノシャカ マワールミタイナモノナンダ。アイツセー サカ

あの坂を 回るみたいなものなんだ。 あっちの方に 坂が

Track 36

アルンダ。ソレフルベデモ ノ。ダカラ カンチャーノトキニダバ ホレ
あるんだ。それ古部でも ね。だから 干潮の時になら ほれ
イシポンポンワタッテイグネーダッテ マンチャーノトキワ
石をぽんぽん渡って行くことはできるんだけど 満潮の時は
ジェンジェンイカネンダモノ。 マターヤマノボルベサ セツカク
全然行くことができないんだもの。 また山を登るでしょう。 せつかく
オリタノニ マタノボルンダ。
下りたのに また登るんだ。

45 橋本：ハー タイヘンデスネー。

はあ 大変ですねえ。

46 彦野：デナー マエアノタキミニイッテキタベ。 タキミテキタベ。

でなあ 以前にあの滝を見に行ってきたでしょう。 滝を見たでしょう。

アノタキノームコーカラ コンドウオリルワケセ。アノタキニチョットイッタ

あの滝の向こうから 今度は下りるわけです。あの滝にちょっと行った

ムコーサイッタトコマデノー。フルベノシトタチ ハタケマイタモンダダ。
 向こうに行った所までねえ。古部の人たちは 畑に(種を)蒔いたものなんだ。
 じゃがいもマイタリ かぼちゃマイタリ ナニカコー ショクリョーニ
 ジャガイモを蒔いたり カボチャを蒔いたり 何かこう 食糧に
 ナルモノマクッタッテー フルベモナンモ ホラ トチガネーンダモノ。
 なるものを蒔くといったって 古部にも何も ほら 土地がないんだもの。
 スィグヤマダベサ。
 すぐ山でしょう。

47 橋本：ドコニ ハタケツクッテタンデスカ。

どこに 畑を作ってたんですか。

48 彦野：ソレデ ホンダ

それで それだ

Track 37

タキノチョットイッタトコマデノー ナンボカタイラナンダ。ズーットノ
 滝のちよっと行った所までねえ いくらか平らなんだ。ずうっとね
 ノボツケルトキワ サカダモノ。アノタキノチョットイッタドゴサニノ
 登ってくる時は 坂だもの。あの滝のちよっと行った所にね
 スグココミタイニ コツヂタイラナンダ ナンボカ ノ。
 すぐここみたいに こっちの方は平らなんだ いくらか ね。

49 橋本：ナルホド。

なるほど。

50 彦野：ホンダカラ ソノータイラナトコデー いもマイタリ かぼちゃマイタリ。
 それだから その平らな所で イモを蒔いたり カボチャを蒔いたり。
 ホレー ジィブンノセーカツスル セーカツスルモノヲマイテ ホラ
 ほれ 自分が生活する 生活するものを蒔いて ほら
 デキレバ ホツタリ モイダリシテ ショッテデオリテ
 (実が) できれば 掘ったり もいだりして 背負って下りて
 セーカツシタモノサ。
 生活をしたものです。

51 橋本：フルベトトドホツケトワ カナリムカシカラ コーリユーワアッタノデスカ

古部と榎法華とは かなり昔から 交流はあったのですか

ヤマコエテ。

山を越えて。

52 彦野：ソーソー。

そうそう。

Track 38

53 橋本：ドノクライ ジカンカカリマシタ トホデ。
どのくらい 時間がかかりました 徒歩で。

Track 39

ココカラフルベマデ アルイテ。
ここから古部まで 歩いて。

54 彦野：ソイコサー ガッコーモネカッタダカラ。
それこそ 学校もなかったんだから。

55 橋本：フルベニネ。
古部にね。

56 彦野：ソイデ ナンボーアレ。 フルベノガッコー ゼンブ
それで どのくらい（以前だったか）あれは。 古部の学校を 全部
ホゴシテ フネデハコンダコトアルンダ。コッチャドーロガナンボガデキテカラ
解体して 船で運んだことがあるんだ。 こっちの方に道路がいくらかできてから
ノ。シタードーロアルイター キノハシノトコマデ ホラ アルイターイケネー
ね。下の道路を歩いて 木の橋の所まで ほら 歩いては行かれない
トコマデイッテ ガッコーイラナクナッタダ。ソイデ セートスクネーカラ
所まで行って 学校が必要なくなったんだ。それで 生徒（数）が少ないから
ナンジューニンモイネーモンダモノダカラ ガッコーヤラナクテ コンドワ
何十人もいないものだから 学校をやらなくて 今度は
ココデー ココノショーガッコーノキョーシツ フタツカミツカタサネバ
ここで この小学校の教室を 二つか三つ増築しなければ
ナラナイッチュンデー フルベデイラナイッチュンデー ソレホゴシニ
ならないというので 古部で（学校が）必要ないというんで それを解体しに
ホラ イッテキタケドノー。 ソレホゴシテカラモッテキター ソレカラ
ほら 行って来たけれどねえ。 それを解体してから持ってきて それから
ショーガッコータシタンダ。
小学校を増築したんだ。

57 島田：タテマシシタンデスネ。
建て増したんですね。

58 彦野：ドーセオレタチ ショーガッコートキダッテ イマミタイニー ドコノ
どうせ私たちは 小学校の時だって。 今みたいに どの

Track 40

カターモサー コドモシトリカフタリダカラ ノ。オレタチ ショーガッコーノ
家庭でもねえ 子供は一人か二人だから ね。私たちが 小学校の
トキワ シトクラス ロクジューニングライイタモノ。
時は 一クラスに 六十人くらいいたもの。

59 橋本：カナリ ジドースーアッタンダネ。

かなり 児童数があつたんだね。

60 彦野：ココラ

この辺りは

Track 41

ノ イッケンノウチデー コドモノゴニンシチニン イネーウチ イネーウチ
ね 一軒の家で 子供の五人や七人が いない家は いない家は
ネーнда。

ないんだ。

61 橋本：アーアー イッケンノイエ。

あーあー 一軒の家に。

62 彦野：ソーユージダイダカラノー。

そういう時代だからねえ。

Track 42

ソイコサー ムラノフクシ？⁶チョーモイタンダ。ホヤバズインズイダツケノー
それこそ 村の ? いたんだ。ほやばじんじ<人名>だったけねえ
コドモダチ ジューニン ジューニン。

子供たちが 十二人（いたんだ） 十二人。

63 島田：ハイ。

はい。

64 彦野：ジューヨニン ジューゴニンノカゾクダッタモン。ハチニンジューニンノ

十四人や 十五人の家族だったもの。 八人や十人の

カゾクダケ ナンモメズラシクネーнда。

家族だといったところで 何も珍しくはないんだ。

65 橋本：ヒコノサントコワ ナンニンキョーダイダツタンデスカ。

彦野さんの所は 何人兄弟だったんですか。

66 彦野：オラノ

私の

Track 43

オレットコワ オレノーアンニャ シンダカラノー。フタリ ソレサー イマ
私の所は 私の兄は 死んだからねえ。二人と それに 今
ムロランニシトリ オーサカニシトリ。ソイサー ウチデ タタミノウエデ
室蘭に一人と 大阪に一人。 それから 家で 畳の上で
ケガ ?⁷ カタノコーホネオツタッテ イマオタルニ ソレト
けが ? 肩の骨をこう折ったって 今小樽に それと

67 橋本：ワッハハー。

わっはっはあ。

Track 44

68 彦野：ムロランサ シトリー。アー ムロランニフタリダ。

室蘭に 一人。 ああ 室蘭に二人だ。

69 橋本：オー オッオッ。

おう おっおう。

70 彦野：フタリシンデルカラナー。 ヤッパリ ジューニングライイタ。

二人死んでいるからねえ。 やっぱり 十人くらいいた。

No.24、26、28、30、32 では物資の運送状況が語られている。橋本(2012a: 23)で述べたように、三方を山に囲まれた榎法華村と函館を結ぶ自動車道路が開通するのは 1933 年、南茅部を隔てる銚子岬側に国道 278 号線銚子トンネルが完成するのは 1974 年であり、物資の輸送は主に船が担っていた。しかも、搬出ルートは北の古部や南茅部ではなく、南の恵山であった。その理由は、「ドーニカコーニカ とらっくオーキクネーバ オーガタデネーバ クルマハイルクライノドーロワ ツイテアッタ」(No. 30)からである。榎法華から恵山まで船を、恵山から函館まで陸路を利用したのである。この箇所、恵山の古い呼び名が出てくる。橋本(2012b)の「第 4 節 地名・その他」の(87)に磯谷、(94)に根田内が採録されている。これらの地名は、1855 年に書かれた松浦武四郎著『東西蝦夷 山川地理取調図』⁸の地図に掲載されている。榎法華村に近い恵山（山の名称）付近に「イソヤ」、その西隣に「ネタナイ」が見いだされる。戦前までこの名で二つの村に分かれ、特に根田内村は榎法華と函館を結ぶ中継地点として重要な意味を持っていたのである。

No.36 の前半部分では、自分たちの手で船を作った話が語られている。みちのく北方漁船博物館発行の『ムダマハギ～津軽海峡沿岸のムダマハギ型漁船とその建造記録～』(2006)によると、北日本地域の木造漁船に見られる大きな特徴は、ムダマハギと称する独特の構造の漁船が用いられることである。ムダマハギとは「船底にカツラ・ヒバ・スギなどの削り抜き材を使用し、平底の船底に舷側板を接ぎ合わせた構造」『ムダマハギ』(2006: 3)である。このムダマハギ型漁船の中で最も基本的な構造を持つものが、函館市周辺の道南部地域で使用された磯船なのである。当該博物館にも榎法華村を含むこの地域から寄贈された磯船が多数展示されている。たとえば、榎法華村寄贈のムダマハギ型磯船は、全長 660 cm、全幅 122 cm、深さ 45 cmで、ムダマハギの接合方法にオトシクギ（鉄製）と漆を使用し、クルマガイ、ネリガイ、船外機で推進する。この型は、松前郡の松前町、福島町、上磯郡木古内町、それに函館市から寄贈された船のいく艘かと共通している（『ムダマハギ』(2006: 45)）。

磯船を本当に漁師自身が製作したのか、それとも玉村氏のような地元の船大工に依頼して作ったものか確認していないので不明であるが、ブナやカツラの大木を削り抜いて作る丸木舟は、青森県六ヶ所村泊地区では、専門の船大工ではなく、漁師自身が山に入り「船作り（フナウチ）」をしたということが記録されている（『海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』(2002: 10)）。ムダマハギ型漁船は丸木舟から発展した構造の船であり、独特の部分の製作術と道具を必要とすることから、彦野氏の証言を文字通りに受け取ることはできないかもしれ

ない。

No.36 の後半部分及び No.38、40、42、44、46、48、50、54、56 では、楳法華村の北隣り（地図 1 の銚子岬の上）に位置する古部（旧南茅部町古部、現在函館市）の戦前の様子が述べられている。恵山岬の西側の根田内村が函館への物資の中継場所であったのに対し、ほぼ反対側の古部は郵便局員が楳法華村から配達品を運ぶ地区なのである。そのルートは二つあった。一つは山越えのルートで、常時使用可能であるが、冬の雪の季節には通行に難儀したようである（No.36、38、40、42）。もう一つのルートは、銚子岬の海岸側を回るルートで、干潮時に露出した石を伝って歩くので、満潮時には使用できない（No.42、44）。二つのルートは銚子トンネルが完成するまでであったようであるが、楳法華村と古部をつなぐ大切な生活道であったのである。

No.46、48、50 では、山と海とに挟まれた狭隘の土地で耕作する古部の人々の生活の様子が生き生きと描かれている。彦野氏の言及している「滝」は、現在全長 1460m の銚子トンネルから南茅部町側の滝の沢トンネル付近にある滝で、楳法華村との境界線上にある。この滝を過ぎると古部に出る。彦野氏の説明があまりに詳しいので、No.51 で橋本は「フルベトトドホケットワ カナリムカシカラ コーリユーワアッタノデスカ ヤマコエテ」と尋ね、No.52 で肯定の答えを得ている。

No.56 では、交流の具体例として学校の解体と増築について語られている。彦野氏によると、古部の学校が廃校になり、校舎を解体して、その木材等を船で楳法華まで運んだ。いつの出来事なのかについて言及はないが、『村史』（1989: 1298, 1299）の年表には、1935 年（昭和 10 年）9 月 6 日楳法華尋常高等小学校屋内運動場等竣工（屋体、教室、作法室）、同年 10 月 13 日楳法華尋常高等小学校落成式の挙行の記録がある。これが「フタツカミツタサネバナライチューンデ」に当たるかどうかは不明である。

No.58、60、62、64、66、68、70 には、小学校の一クラスの児童数から各家庭の子供の数の多さについて述べられている。

3. 戦前の出稼ぎの様子

Track44 後半から Track56 は、彦野氏が 15~16 歳の頃（1940 年頃）の出稼ぎの思い出である。

Track 44

71 橋本：アレツ アトネ ヒコノサンガデカセギニデカケタノワ イクツグライデスカ。
あれっ あとね 彦野さんが出稼ぎに出かけたのは いくつぐらいですか。
コートーショーガッコーソツギョーシテカラ
高等小学校を卒業してから

Track 45

ジューハチグライ デカセギニデタノワ。
十八ぐらい 出稼ぎに出たのは。

72 彦野：ジュー イチバンサキニイッタトキワー オレー ジューハチデネー
十 一番最初に行った時は 私は 十八じゃない
ジューロクダヨ。
十六だよ。

73 橋本：アー ジューロクデ。
ああ 十六で。

74 彦野：ジューロクサイ。
十六歳。

75 橋本：マンデジューロク。
満で十六。

76 彦野：ハッ。
はっ。

77 橋本：マンデジューロク カゾエ。
満で十六 (それとも) 数えで。

78 彦野：カゾエデ。
数えで。

79 橋本：カゾエデジューロク。
数えで十六。

Track 47

カゾエデジューロク。
数えで十六。

80 彦野：ショーガッコーロクネンマデイッテー ノ。ショーガッコーロクネンマデイケバ
小学校を六年まで行って ね。小学校を六年まで行けば
ジューシダベサ。コートーカニニネンオワレバ ジューロクダモノ。
十四でしょう。 高等科二年が終われば 十六だもの。
オワルノマッテイクンダカラ。
終わるのを待って行くんだから。

81 橋本：アレー ナニ ドッカカラコエガカカルンデスカ。
あれえ 何 どこかから声がかかるんですか。
アノー ギョギョークミアイトカ。
あもう 漁業組合とか (から)。

Track 48

ナンカ ドッカカラデカセギガアルヨーッテ。
何か どこからか出稼ぎがあるようって。

82 彦野：デカセギワ ノ
出稼ぎは ね

Track 49

シツヨーナトコノカイシャニ シトガタガ ナー ココサタノミニ
必要とする所の会社に (その会社の) 人たちが なあ ここに頼みに
クルンダー。
来るんだ。

83 橋本：アー ナルホドネ。

ああ なるほどね。

84 彦野：ココワ ホラ ソイコサ ウマレオチテカラサ ドコサモイクコトナインダカラ。
ここは ほら それこそ 生まれ落ちてからね どこへも行く所がないんだから。
ミンナ ソイコサ リョーシャッテンノ ワカルベサ。 ダカラ ココエクル
みんな それこそ 漁師をやったよ わかるでしょう。だから ここへ来る
ココエクルノセ。
ここへ来るわけだ。

85 橋本：アー ボシューシニネ。

ああ 募集しにね。

86 彦野：ソイコサ イマノオクシリ

それこそ 今の奥尻

Track 50

ノ ガッコウサクルワケサ。

ね 学校に来るわけさ。

87 島田：ガッコウニクルンデスカ。

学校に来るんですか。

88 彦野：ソーソー。

そうそう。

89 橋本：ジャ ガッコウノセンセイモ シッテルンデスネ。

じゃ 学校の先生も 知っているんですね。

90 彦野：ダカラ

だから

Track 51

ロクネンセーマデダラ ノ。アンマリコネータッテ
六年生までなら ね。あんまり (募集の人は) 来ないけれど
コートーカサイッテルアダリワ ニネンアルコートーカサ
高等科へ行っている頃は 二年ある高等科に
セキノコッテルンダカラ ノ。ソノウチ イエサ ホラ マーコンドワ
籍が残っているんだから ね。そのうちに 家に ほら まあ今度は
カクカテーサ ガッコウカラレンラクアルンダ コーユットカラホシー
各家庭に 学校から連絡があるんだ こういう所から欲しい

ホシーダトカ ノ。ソイコサー シューショクスンダラ ソノママ
欲しいだとか ね。それこそ 就職したいなら そのまま
ソノカイシャサー
その会社に

91 橋本：ハイッテ。

入って。

92 彦野：ハイッテ ヤルッタッテー ミンナダレシタラコトダレモイネーカラ
入って 就職をするけれど みんなそんな気がないから
イッテトキクレバ カエッテクルノ。シゴトダトオモッテルンダカラノ。
(会社)に行くと時がくれば 帰って来るよね。仕事だと思っているんだからね。

93 橋本：ナルホドネー。

なるほどねえ。

Track 52

94 彦野：イマミタイニ ソイコサー イグドゴネーデネーダ。 イグドゴミンナ
今みたいに それこそ 行く所がないわけではないんだ。行く所はみんな
ホントニドコデモアルンダ。ドコデモミンナ シト ホラー ソイカラ イマダラ
本当にどこでもあるんだ。どこでもみんな 人 ほら それから 今なら
ココサ トーキョーサイクッタッテ ナンダッテ ノ ソラッテイクダッテー。
ここで 東京に行くといっても 何だって ね すぐに行けるんだけども。

95 橋本：イケルケドネー。

行けるけれどねえ。

96 彦野：イケルケド アー ドコダカノ

行けるけれど ああ どこだかの

Track 53

ダレダカノ アレ ナイチサイクッ ハタラキニイッタッテヨー ナイチサ
誰かがね あれ 内地に行く 働きに行つたてよう 内地に
ハタラキニイッタッテユート オーッテユッタモンダ。ミンナ ソーユージダイ
働きに行つたて言うとおおつて言つたもんだ。みんな そういう時代
ダカラ ノ。
だから ね。

97 橋本：デマー ソトデレマスヨネ。デカセギニデタラネ。 アーレ イッタンハコダテニ
でまあ 外に出れますよね。出稼ぎに出たらね。 ああれ いったん函館に
イクンデスカ ソノ
行くんですか その

Track 55

ソノ デカセギニイクッテキマッタラー。
その 出稼ぎに行くって決まったら。

98 彦野：ミンナイッテー ダカラ ハコダ
 みんな行って だから はこだ

Track 56

ハコダテノカイシャ ミンナアツタンダ トージワノ。
 函館の会社 みんなあったんだ 当時はね。

99 橋本：ハコダテニネ。
 函館にね。

100 彦野：ニチロトカ ニッスイ。
 日魯とか 日水。

楳法華の漁師の家では普通、尋常小学校の高等科を卒業すると漁業に従事するが、それとは別に、主に函館の水産会社から、非正規雇用の募集があったようである。No.80、82、90で、高等科卒業時（数えて16歳）に学校を介して各家庭に募集の通知があった：No.90「カクカテーサ ガッコーカラレンラクアルンダ コーユットカラホシーダトカ」。

戦前には函館は北千島を漁場とした北方漁業の前線基地であった。特に、日魯漁業はそれまで存在した多くの水産会社を統合して、昭和7年にロシア領漁業の独占的地位を確立した。函館市北洋資料館発行の『北洋サケ・マス漁業の歴史』（2007: 7）によると、母船式サケ・マス流し網漁業が発達すると共に昭和7年以降の出漁が急増し、昭和14年、15年前後には北千島漁業の最盛期となり、総漁獲高1,480万円、漁獲数1億3,000万尾（北洋全体の60%）、漁業従事者数19,000名に達した。彦野氏が高等科を卒業したのは、だいたいこの頃である。

もう一つ興味深い言及は、まれに楳法華から東京を含む内地（本州）へ出稼ぎに行く者がいて、当時それが大いに羨ましがられるような事態であったということである：No.96「ダレカノ ... ナイチサハタラキニイッタツテユート オーツテナモンダ」。No.94で彦野氏が述べているように、生まれて育った村で仕事に従事して一生を終える人々の多かった時代に、遠く離れた本州に出かけること自体、一大事件であったのであろう。

『村史』（1989）は網羅的に楳法華村の歴史を綴った優れた記録集であるが、残念ながら、出稼ぎや若者へのリクルートに関する記述が見当たらない。当時を体験した人たちが姿を消していく中で、本稿の調査は貴重な資料であると考えられる。

4. 方言語彙について

彦野氏の語りの中から方言語彙と思われるものを抽出する。「あいうえお」順に提示し、各語彙に標準日本語の意味、実例とそれの現れる箇所（番号）を付す。また、石垣福雄（1983）に収録されている語彙には、末尾に<IS>を加える。

A. あ行

(1) アイダ、アイダカラノ、アイダノセ：あれだ、あれだからね：

「デンキ、ホラ、アイダカラノ（電気はほらあれだからね）」[No.36]

- (2) アイッセー：あっちの方に：
「アイッセーサカアルンダ（あっちの方に坂があるんだ）」[No.44]
- (3) アシコ、アシコカラ：あそこ、あそこから：
「アシコカラチョイトイッタトコー（あそこからちょっと行った所に）」[No.19]
- (4) アダリ：～頃：
「コートーカサイッテルアダリワ（高等科へ行っている頃は）」[No.90] <IS: 27B>
- (5) アドモー：けれども：
「アドモーデーデモスキナトコロカラオリデー（けれどもどこでも好きな所から下りて）」[No.23]
- (6) アブネー：危ない：
「オリラレナイケドナ、アブネーカラ（下りることはできないけれどね、危ないから）」[No.23]
- (7) アルク：通る、動く、移動する：
「ケートラックガアルクグレー（軽トラックは通れるくらいの）」[No.14] <IS: 35B>
- (8) アンニャ：兄：cf. アンチャ：兄、小僧 <IS: 36B>
「オレノーアンニャシンダカラノー（私の兄は死んだからねえ）」[No.66]
- (9) イマダラ：今なら：「イマ（今）」＋「ダラ（なら）」⁹
「イマダラナンボデモアルデショ（今ならいくらでもあるでしょ）」[No.42]
- (10) オラ、オレ：わたし、オレたち：私たち：cf. オラダ：私たち <IS: 72B>
「オラノ、オレトコワ（私の、私のところは）」[No.66]
「ドーセオレたちショーガッコートキダッテ（どうせ私たちは小学校の時だった）」[No.58]

B. か行

- (11) カンゼ：風：
「カンゼファイタリシケタリスレバ（風が吹いたり時化たりすれば）」[No.32]
- (12) クチ：靴：
「クチデモナンモサー（靴でもなんでもねえ）」[No.42]
- (13) ケツ：後ろ：
「オラモナンカイカハイタツノケツツイデ（私も何回か配達夫の後ろからついていて）」[No.42]
- (14) コーコン：このような：
「コーコンナゲーモンツィクッテー（このような長い物を作って）」[No.42]
- (15) コーハー：このように：コー「こう、このように」＋ハー「もう」⁹
「ソレヲナンボコーハーワタシテ（それを何本もこのように渡して）」[No.33]
- (16) コッチャ：こちらの方：
「コッチャドーロガナンボカデキテカラ（こちらの方に道路がいくらかできてから）」

[No.56]

(17) コンナンノー：このような：

「ミジケーコンナンノクチシカ（短いこのような靴しか）」[No.42]

C. さ行

(18) シイル：着く：

「ココニシイルワケダ、オクルシトワノ（ここに着くわけだ、送る人はね）」[No.42]

(19) ジッコ：ズック：c.f. ジッコ：じいさん <IS: 158B>

「キレデツイクッタ ジッコミタイナモンデノー（布で作ったズックみたいなものでねえ）」[No.42]

(20) ショーネカッタ：仕方がなかった：ショーネー<形容動詞>+カッタ<PAST TENSE>

「ショーネカッタンダ、ココカラナンモネーカラ（仕方がなかったんだ、ここから何も
ないから）」[No.14]

(21) スクネー：少ない：

「セートスクネーカラ（生徒（の数）が少ないから）」[No.56]

(22) スム：する：

「シューショクサスンダラ、ソノママソノカイシャサーハイッテ（就職がしたいなら、
そのままその会社に入って）」[No.90]

(23) ズーント：ずうっと：

「イマズーントココガドーロセ（今はずうとここが道路です）」[No.14]

(24) セ：～です：

「アノタキノムコーカラ、コンドワオリルワケセ（あの滝の向こうから、今度は下りる
わけです）」[No.46]

(25) ソイサー、ソイカラ：それから：

「オーサカニシトリ。ソイサーウチデ、タタミノウエデ（大阪に一人。それから家で、
畳の上で）」[No.66]

(26) ソイデ：それで：

「ソイデナンポーアレ（それでどのくらい（以前だったか）あれは）」[No.56]

(27) ソイナ：そういう（も）の：

「ソイナミンナコジンデヤッタモンダ（そういうのをみんな個人でやったもんです）」

[No.23]

(28) ソシテ：そんな風に：

「ソーヤッテノー、ソシテヤッタモンダカラ（そうやってねえ、そんな風にやったもの
だから）」[No.36]

(29) ソレコサー、ソイコサー：それこそ：

「ソレコサーウチワカゾエルダケシカナカッタンダ（それこそ家は数えるしかなかった
んだ）」[No.12]

- (30) ソレサー：それに：ソレ「それ」＋サ（一）「に＜助詞＞」⁹
「フタリ、ソレサーイマムロランニシトリー（二人と、それに今室蘭に一人と）」[No.66]

D. た行

- (31) ～ダケ：～だといったところで：
「ハチニンジューニンノカゾクダケ、ナンモメズラスクネーнда（8人や10人の家族だといったところで、何も珍しくはないんだ）」[No.64]
- (32) タス：増す：
「ソレカラショーガッコウタシタンダ（それから小学校を増築したんだ）」[No.56]
- (33) ～ダッテ：～だけれど：cf. ～タッテ：～けれども：「あれは、からだ小さいタッテ強いぞ」<IS: 196A>
「イシポンポンワタッテイグネーダッテ（石をぽんぽん渡って行くことはできるんだけれど）」[No.44]
- (34) ダバ：～であれば、～だったら：cf. <IS: 198A>
a. 「ソノトージダバ（その当時であれば）」[No.17]
b. 「カンチャーノトキダバ（干潮の時だったら）」[No.44]
- (35) ～ダベサ：～ですよ：cf. ～だろうよ：「お前、男ダベサ。弱音ふく（はく）な」<IS: 198B>
「ムコーワトミウラダベサ（向こうは富浦ですよ）」[No.10]
- (36) ～ダラ：～だったら⁹：cf. ばか（者）「何をダラなことして歩くんかね」<IS: 201A>
「ロクネンセーマデダラノ（6年生までだったらね）」[No.90]
- (37) ～チューンデ：～というので：
「フルベデイラナイチューンデ（古部でいらないというので）」[No.56]
- (38) ツカイテル：使っている：
「ジブンデツカイテルノワ（自分で使っているのは）」[No.23]
- (39) ドゴ：ところ：<IS: 228A>
「アノタキノチョットイッタドゴサニノ（あの滝のちょっといったところにね）」[No.48]

E. な行

- (40) ナイチ：内地、本州：cf. <IS: 239B>
「ナイチサハタラキニイッタッテユート（内地（本州）に働きに行ったっていうと）」
[No.96]
- (41) ナゲー：長い：
「ナゲーノッテタラナゲーノ（長いのだったら長い）」[No.42]
- (42) ナンテカテ：どうやっても：cf. ナンテカンテ：何といたって「子どもはナンテカテ親にかなわない」<IS: 246A>
「コッチワナンテカテコッチエイカレネーカラ（こちらはどうやってもこっちへは行かないから）」[No.32]

- (43) ナンボ：どのくらい：cf. いくら <IS: 246B>
「ソイデナンボーアレ（それでどのくらい（以前だったか）あれは）」 [No.56]
- (44) ナンボガ：いくらか：cf. <IS: 246B>
「コッチャードーロナンボガデキテカラノ（こっちの方に道路がいくらかできてからね）」 [No.56]
- (45) ネー、ネ：ない、～できない：cf. <IS: 251A>
a. 「イマミタイニフナイレバモネーシ（今みたいに船入れ場もないし）」
b. 「マンチョーノトキワジェンジェンイカネーンダモノ（満潮の時は全然行くことができないんだもの）」 [No.44]
c. 「ナンジューニンモイネーモンダモノダカラ（何十人もいないものだから）」 [No.56]
d. 「コッチワアルカレネーシ（こっちの方は歩くことができないし）」
e. 「イグドゴネーンデネーンダ（行くところがないわけではないんだ）」 [No.94]
f. 「ガッコーモネカッタンダカラ（学校もなかったんだから）」 [No.54]
- (46) ～ネバ、～ネーバ：～なければ：
a. 「とらつくオーキクネーバ、オオガタデネーバ（トラックが大きくなければ、大型でなければ）」 [No.30]
b. 「ヤマコエネバ（山を越えなければ）」 [No.40]
- F. は行
- (47) ～ベー、～ベサ：～でしょう：cf. ベ：～ろう、～よう（推量・意志・勧誘を表す）<IS: 288B>、～ベサ：～だろうさ<IS: 290A>
a. 「マエノアノタキミニイッテキタべ（以前にあの滝を見に行って来たでしょう）」 [No.46]
b. 「マターヤマノボルベサ（また山を登るでしょう）」 [No.44]（2例は確認を表す）
- (48) ホイデ、ホイデモ：それで、それでも：
a. 「ホイデココニユービンキョクガ（それでここに郵便局が）」 [No.38] <IS: 296A>
b. 「ホイデモ、トージデモヤッパリノー、デンチューワタッテタンダー（それでも、当
時でもやっぱりねえ、電柱は立っていたんだ）」 [No.36]
- (49) ホゴス：解体する：cf. ほぐす「セーターホゴシテ手袋編んでやる」<IS: 298B>
「フルベノガッコーゼンブホゴシテ（古部の学校を全部解体して）」 [No.56]
- (50) ホンダ、ホンダカラ：そうだ、それだから：cf. そうだ「ホンダホンダ、あいつに頼めばいい」<IS: 303B>
「ホンダカラソノタイラナトコデー（それだからその平らな所で）」 [No.50]
- (51) ホントノ：実際の：
「ホントノウチアルトコマデイカレーネーワケサ（実際の家のある所まで行かれないわけさ）」 [No.42]

G. ま行

(52) マク：(種を) 蒔く、植える：

- a. 「ハタケマイタモンダ (畑に (種を) 蒔いたもんだ)」
b. 「ジャガイモマイタリ、カボチャマイタリ (じゃがいもを植えたり、かぼちやを植えたり)」 [No.46]

(53) ミジケー：短い：

「ミジケーコンナンノクチシカ ((丈の) 短いこのような靴しか)」 [No.42]

(54) モツテイク：運んで行く：

「チョットエサンマデフネデモツテイクバー (ちょっと恵山まで船で運んで行けば)」
[No.28]

H. や行

(55) ヤッパー：やはり、やっぱり：<IS: 336A>

「ヤッパーガキノコロカラアッタケドモノ (やっぱり子供の頃からあったけれどもね)」
[No.38]

I. ん

(56) ンダカラ：それだから：cf. ンダラ：それでは、それならば「お前行くか、ンダラおれも行くさ」<IS: 360A>

「ンダカラノ、キレデツィクッタ (それだからね、布で作った)」 [No.42]

彦野氏の談話から選びだした 56 例中、石垣福雄(1983)に掲載されているのは 18 例である (4, 7, 10, 19, 33, 34, 35, 36, 39, 40, 42, 43, 44, 45, 47, 48, 49, 55)。このうち本談話の意味と明らかに異なるものが 2 例 (19. ジッコ:ズック - じいさん、35. ダラ:~だから - ばか(者))、形態の若干異なるものが 3 例 (8. アンニャ - アンチャ、33. ~ダッテ - ~タッテ、42. ナンテカテ - ナンテカンテ) 見出せる。後者の 3 例については異形態ということで説明できるが、前者の 2 例については、明らかに品詞や意味に違いがある。

石垣(1983)には榎法華を採録地とする語が全部で 369 語掲載されているが、本稿で拾い上げた中で 37 語 (約 10%) は未掲載である。もちろん、榎法華以外の採録地の掲載語の中にもこれらの語は見当たらない。その理由として、石垣(1983)では音韻のレベルの相違で処理している語がこの中に含まれている可能性がある。たとえば、(1)アイダ、(3)アシコ、(6)アブネー、(11)カンゼ、(12)クチ、(13)コッチャ、(16)コンナンノ、(21)スクネー、(25)ソイカラ、(26)ソイデ、(29)ソレコサ、ソイコサ、(30)ソレサー、(41)ナゲー、(53)ミジケーの 14 例がそれに当たるだろう。ただし、音韻を基準とした判断には揺れがある。石垣(1983)にもこのタイプの語が散見されるからである。たとえば、あ行だけでもアグ「あく(灰)」、アジメル「集める」、アッチャ「あちら、あっち」、アノサ「あのね」、アブル「浴びる」、アマモヨ「雨模

様)、アラガダ「あらかた」、アrik「歩く」、アンダ「あんた、お前」、アンベ「あんばい、具合」などである。元来、何を基準にして語彙レベルの方言と認定するののかについては、客観的な根拠に乏しいきらいがある。先の 14 例を語彙レベルの方言語彙とすることを妨げる積極的な理由はないと言える。

もう一つの理由は、彦野氏特有の言い回しがある可能性である。たとえば、(5)アドモ<アドモーシトツ「あともう一つ」、(12)クチ「くつ」、(13)コーコン「こうこんなように」、(27)ソイナ「そいなもの」、(51)ホントノ「本当の」=>「実際の」、(52)マク「種をまく」=>「それ以外の農作物を植える」、(54)モツテイク「持って行く」=>「運んで行く」などが挙げられよう。これらの語彙が個人特有の言い回しなのか、あるいは同じ地域に在住する人たちも用いているのかについては調査する必要がある。後者であることが判明すれば、方言語彙として扱ってよいと思われる。

最後に語彙の問題ではないが、彦野氏談話で数の数え方に興味深い言い回しがあったので触れておく。

No.60: 「ココラノ、イッケンノウチデー、コドモゴニンシチニンイネーウチネーнда (この辺りはね、子供の5人や7人いない家はないんだ)

No.64: 「ハチニンジューニンノカゾクダケ、ナンモメズラスクネーнда (8人や10人の家族だといったところで、何も珍しくはないんだ)

一般に、数の数え方は2つの連続する数字を値の小さい方から大きい方に向かって列挙する形をとる。たとえば、「その箱からりんごをニサンゴ (2、3個) 取ってください」、「会議にはロクシチニン (6、7人) の人が来ます」のようにである。ところが、No.60では奇数で始まる場合には値の一つ上の偶数6を飛ばして、同じ奇数の7が連続している。同様に、No.64の偶数始まりでは、一つ上の値の9を飛ばして偶数の10が現れている。この言い回しは、もう一人の調査協力者である玉村氏の談話でも観察できる。

「タイゲイモ、フタリサンニンゴニンシテネ (たいがい、2人、3人、5人でね)」

<島田・橋本・寺田・塩谷 2001: 178>

2人から3人は通常の可算の仕方であるが、3人の次は4人を飛び越えて奇数の5人が続く。ここで、注意したいのは、次の2点である。

①数え上げる際に、奇数が最初にくる場合には次に値の大きな奇数が、偶数がかかる場合には次に値の大きな偶数が連続する。

②①の数え方は、各数字に分類詞(classifiers)が付加している場合にのみ適用される。

②については、島田・橋本・寺田・塩谷(2004: 90)の玉村氏談話から窺うことができる。

「モノオボエツイダノワ、ジュネンカラネ、ジュニサンネン ネッテイグカラ (物覚えがついたのは、(昭和) 10 年からね、12、3 年になったくらいから)」

この例では「～年」が最後の数字「3」にのみ付いている。②が事実であるならば、「×コドモゴシチニン (子どもが5、7人)」、「×ハチジュニンノカゾクダケ (8、10人のかぞくだといったって)」、「サンゴニンシテネ (3、5人でね)」という形はすべて不可と判断される。反対に、「○ジュニネンジュニヨネン ネッテイグカラ (12 年、14 年になっていくから)」は容認できるはずである。残念ながら、二人以外の話者に確認しているわけではないので、現段階では推測の域を出ていないので、今後の調査が必要である。

北海道方言を研究する際に留意すべき点は、方言話者の先祖の出身地域である。明治以降、ほぼ全国から開拓移民として多くの人々が来道してきた。当然、出身地域の言葉も移入された。様々な方言が混ざり合って独自の形を醸成していった結果、北海道方言が成立するのであるが、このことに関しては石垣(1976)で詳しく論じられている。樞法華の位置する道南地域沿岸部は室町以降という比較的古い時代から主として漁業に従事する者の移住があったため(橋本 2012: 25)、東北北奥地方の方言に由来する言葉を基層にして明治以降の、福井、新潟等の北陸地方の方言やその他の本州地域の方言が取り込まれていく形で今日の方言の姿になったと考えられる。採録された語彙と共通する特徴を有する語彙が、北海道以外の地域に存在するか否かを検証することは、石垣(1983)の先駆的な研究成果から是非引き継いでいかなければならない重要課題である。

5. 結び

本稿で採録した談話には第 2 節に見るように、太平洋戦争前後の樞法華を中心とする下海岸地域(恵山、南茅部を含む渡島半島東岸部)の様子が活写されている。特に、道路やトンネル、港といったインフラの整っていない状況下で、村人たちがどのような工夫と苦勞をして生活を営んでいたかが具体的かつ詳細に描かれている。第 3 節の出稼ぎについては、函館の北洋漁業の隆盛との関連で読み取るべき性質のものである。磯船に頼る沿岸漁業を生活の基礎に据えながらも、企業の大規模経営の傘下に入って戦前の日本の漁業を支えた人々がここにいたのである。両節での証言は、たとえば『村史』のような正史の行間を埋めてくれる大切な役割を果たすであろう。

第 4 節で提示した語彙には石垣(1983)に未収録なものが数多く含まれていた。その理由や意義については十分な説明ができていないが、特有の数え上げの仕方と併せて明らかにした貢献は評価してよいのではないだろうか。今後は、新たな方言話者の協力を得て、発見された事実の検証を行うと同時に、地理的につながっている渡島半島西岸部及び海峡を隔てて接している青森県の方言語彙との共通点と相違点を調査・研究していかなければならない。

謝辞

* 本調査研究は、平成 23 年度科学研究費補助金（課題番号：23520540）の交付を受けて行われている「旧楸法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」における研究の一部を公にしたものである。現地調査をするに当たって協力して下さった共同研究者の塩谷亨室蘭工業大学教授と寺田昭夫室蘭工業大学名誉教授、長時間に渡るインタビュー調査に協力して下さった彦野勇氏、玉村栄吾氏に心からの感謝を申し上げたい。また、貴重なコメントを寄せて下さった 2 名の査読委員の方々にも謝意を表したい。もちろん、本稿の誤りや不十分な点はすべて筆者の責任であるのは言うまでもない。

注

- ¹ 例文の表記法として、固有名詞には下線を、カタカナ語はひらがなで表記する。
- ² 玉村栄吾氏は楸法華村に在住する大正 15 年生れの元船大工であり、2000 年のプロジェクト開始時から調査に協力して下さっていた。
- ³ 『楸法華村全図』は、楸法華村役場発行の 2 万 5 千分の 1 の地形図（（承認番号）平 8、道復 780 号）を用いた。
- ³ 聞き取り不明箇所である。
- ⁴ 聞き取り不明箇所である。
- ⁵ 聞き取り不明箇所である。
- ⁶ 聞き取り不明箇所である。
- ⁷ 聞き取り不明箇所である。
- ⁸ 『楸法華村史』所収資料によった。
- ⁹ これらの分析はすべて査読者よりご指摘いただいた。貴重なコメントに対し感謝申し上げたい。

参考文献

- 石垣福雄 (1976) 『日本語と北海道方言』北海道新聞社。
_____ (1983) 『北海道方言辞典』北海道新聞社。
島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨 (2001) 「楸法華（とどほっけ）における言語と風習－失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第 51 号、173~182。
島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨 (2001) 「楸法華（とどほっけ）における言語と風習－失われゆく伝統(3)」室蘭工業大学紀要第 54 号、79~90。
楸法華村（編）(1989) 『楸法華村史』ぎょうせい。
函館市北洋資料館（編）(2007) 『北洋サケ・マス漁業の歴史』函館市北洋資料館。
橋本邦彦 (2012a) 「渡島半島東岸部の漁業関係の語彙」北海道言語文化研究第 10 号、23~37。
_____ (2012b) 「渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について」室蘭工業大学紀要第 62 号<印刷中>
橋本邦彦・島田武・塩谷亨 (2011) 「楸法華の漁業について」室蘭工業大学紀要第 61 号、77~88
みちのく北方漁船博物館（編）(2002) 『特別展 海と船と漁労の記録～六ヶ所村泊地区～』みちのく北方

漁船博物館

_____ (2006) 『ムダマハギ～津軽海峡沿岸のムダマハギ型漁船とその建造記録～』 みちのく北方漁船博物館.

執筆者紹介

氏名：橋本 邦彦

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email : 92hashimot@gmail.com

